

『ダビデの子についての問答』

聖書 マタイによる福音書22章41～46節 讃美歌 355 356

説教 森田幸男牧師

ただ今お読みしましたところに、イエス様とファリサイ派の人々のやり取りが示されております。聖書はこのように私たちが信じるイエス様のことを「イエス」と呼んでおります。これはイエス様の固有名であります。イエスというのはユダヤ人に珍しい名前ではありません。元来はイスラエルの人たちのヘブライ語で言うならば「ヨシュア」になります。それを当時広く人々が使っていた通用語のギリシャ語音に言い換えたものが「イエス」になっているのです。これは意義深い名前で、「ヨシュア」の最後の「ア」は「ヤーウエ」を指し、「神は救いである」という意味を持った名前が「イエス」です。皆さんはこの「救い主・イエス様」のことを自分としてはどういうふうに日頃呼んでおられるでしょうか。わたしも昔「イエス・キリスト」或いは「イエス」と言っていた時期もありましたが、ある時期からわたしは「イエス様」と様をつけて呼ぶようになりました。それ以前は神様も「神」というふうに呼んでいましたが、そのような時期にあわせて「神様」とお呼びするようになりました。この呼び方というものは非常に微妙で、呼ぶ相手と自分との関係を端的に表わすと思うのです。「イエス」「イエス・キリスト」「神」とこういう呼び方をしている時は、イエス様にしても神様にしても第三者的というか、本当に直面しているお方という感じではなくて、話題の対象という響きがありますね。けれども「神様」「イエス様」とお呼びする時には、その呼ぶ自分と神様との関係、イエス様との関係がもっと親しい間柄にあるということを表わすと思うのです。

ところで、日本ではクリスチャン人口は1%と言っていた時代もありますが、今では日本の総人口が一億二千万をもう越えています。前に一億ぐらいの時は1%と言えば百万になります。その後クリスチャン人口は余り増えないで、日本の人口が増えたので、今は0.8%ぐらいと言われています。そういうことで日本でクリスチャンは少数者であります。そういう日本でも「聖書」という書物はベストセラーなんですね。そして一般の日本人は、このイエス様のことを何と呼んでいるのでしょうか。「キリスト」と呼ぶのが一般的ではないのでしょうか。「イエスは・・・」と言うと「何のこと？」と聞き返されるかもしれませんが、「キリストは・・・」と言えば、了解ということになると思います。ですから「キリスト」という呼び方がイエス・キリストを指す一般的な呼び名になっていると思います。「イエス」は元々固有名詞ですが、「キリスト」というのは固有名ではなかったのです。これは「神様

が遣わしてくださる救い主・救世主」という意味合いで「キリスト」という言葉が使われました。

でも今日の聖書の箇所には「キリスト」という言葉はありません。「あなたたちはメシアのことをどう思うか」というので、「メシア」という言葉が出ております。これは新約聖書の原典では、「メシア」ではなくて「キリスト」という言葉が使われているのです。ここではわざわざヘブライ語を、イスラエルの人たちの言葉を使っているわけですが、メシアもキリストも同じ意味内容です。これは、「神様が遣わしてくださるところの救い主」という意味で当時は使われていました。

私たちはそれぞれイエス様のことをどのようにお呼びしているかによってイエス様と自分の関係が分かると思います。例えば、カトリック作家の遠藤周作という方が沢山本を書かれました。もう亡くなられましたけれども、「あなたにとって結局イエス様はどういう方でしたか」と質問したら、彼はきっこう答えたと思うのです。「イエス様はわたしにとっては同伴者です」と。皆さんにとってはどうでしょうか。

当時のイスラエルの人たちは、「メシア」を神様が遣わしてくださる「救い主」という意味で使っていたのですが、そのような中でユダヤ人たちが「メシア・救い主」を言い換える言葉として一番用いていたのが、今日のところに出てくる、「ダビデの子」という言い方だったのです。ファリサイ派というのは特に熱心なユダヤ教の宗派で、律法学者と言われる人たちも大方はこのファリサイ派に属しておりました。そういう人たちにイエス様は、「あなたたちはメシアのことをどう思うか。だれの子だろうか」と問われたら、「ダビデの子です」と答えています。この言葉が当時一番「メシア」の言い換えとして用いられていた証拠です。「ダビデ」というのは今から三千年ほど前の、イスラエル国の二代目の王様だったのです。初代の王様は「サウル」と言いましたが、このサウルに次いで王になって南北両王朝を統一してイスラエルの統一国家を築いたのがダビデでした。この人は全く問題がないわけではありませんが、いろんな意味で非常に優れた王様でありました。

イエス様在世当時はローマ帝国時代で、イスラエルばかりではありませんが、イスラエルにもローマ軍が駐留していました。感じとしては今日米軍が日本を始め世界の諸所方々に駐留しているようなものです。そういう状態で、当時はローマ軍が世界を支配していたのです。しかし、神を唯一の王と信じるイスラエルの人たちにとってこれは決して歓迎できる状態ではなかったので、神がこういうローマの支配をくつがえしてくれる救い主・メシアをイスラエルに遣わしてくださることを待ち望んでいたのです。「ダビデの子」というのは、ダビデのような、あのような王が到来して、イスラエルを独立させてくれることが、「ダビデの子」という言葉の中に込められている人々の期待なのです。

43 節でイエス様は、「では、どうしてダビデは、霊を受けて、メシアを主と呼んでいるのだろうか」と言われて、44 節からかぎ括弧が付いています。これは旧約聖書に詩編とい

うがあります。詩編は 150 篇あるのですが、その 110 篇 (952 頁) はダビデの作とされていて、ここには“ダビデの詩。賛歌”となっています。ダビデという人は音楽的にも優れた人で、詩人的な感覚も持っていました。そういうことで詩・賛美歌を多く作ったであろうと思われます。この詩編 110 篇を、当時のイスラエルの人たちはメシアを神様が遣わしてくださるという預言の詩と受け止めておりました。1 節に、「わが主に賜った主の御言葉」とダビデが言っています。この場合、「わが主」というのはダビデにとっての主です。「・・・賜った主の御言葉」という後半の「主」は神を指します。ですからここにダビデがあり、ダビデにとっての「わが主」と呼ぶ方がいて、そのわが主に神様が与えてくださったお言葉、とこのようになっているわけです。そこでイエス様は、「あなたがたはメシアをダビデの子と言う。けれどもそのダビデ自身がメシアのことをわが主と呼んでいるならば、どうしてメシアはダビデの子になりますか。そのメシアの方がダビデよりも上位ではないですか」とこのように言っておられるのです。ここまではちょっと解説に申しました。

私たちはそのような当時のイエス様とファリサイ派の人たちとのやり取りを今読んだのですが、ここで問題になっていることは当時の問題なわけです。けれども「それならばあなたは本当に今、現代必要な事は何だと考えているのですか。」これに、「神様がメシアを遣わしてくださることです」とこのように言ってもいいかもしれませんが、「本当に救い、平安、それを求めているのです」と言ってもいいと思いますが、結局この聖書の箇所は、「あなたがたが本当に“救い”として思い描いていることは、ダビデのような王様が到来して政治的な解放が与えられることですか。しかしダビデ自身は、わが主と呼んでいるのです。この『主』は神様のことを指すのです。このイスラエルの中にダビデのような王が再来したら、我々の問題は本当に解決しますか」とイエス様は問うておられるのです。「ローマの横暴な支配をくつがえしてくれるようなそういう力ある存在が来たら、我々の問題は解決しますか」と、そういう問題提起をイエス様はなさっていると思います。

それは今日の時代状況に生きる私たちに対する問いでもあると思うのです。現代の日本において、また世界において、本当に何が必要か。あなたはそれをどのように考えるかということ、私たちは今日のこの聖書を通して問われているのです。それは言い換えれば、「あなたはイエス様をどういうふうに呼びますか」という問いに置き換えてもいいと思うのです。そこで今日のところから具体的な答えというのは必ずしも示されていないと思いますが、しかし、ダビデのような優れた王があらわれたら問題が解決するのではなくて、ダビデが「わが主」と呼んでいるそういう質的に違う「神その方」の到来がなければ問題は解決しないのではないですかというのが、今日の箇所から窺えるイエス様の主張です。

そういうところから、今本当に何が必要かということについては、私たちは前回の正午礼拝で読みました。“最も重要な掟”というのが 22 章の 23 節以下に書かれています。「ファリサイ派の人々は、イエスがサドカイ派の人々を言い込められたと聞いて、一緒に集っ

た。そのうちの一人、律法の専門家がイエスを試そうとして尋ねた。『先生、律法（聖書）の中で、どの掟が最も重要でしょうか。』イエスは言われた。『<心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。>これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。<隣人を自分のように愛しなさい。> 律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。』」イエス様は「今最も必要なことはこれだ」と明言しておられるわけです。このお言葉も聞いて、今私たちに必要なことは何なのかということになります。

今朝もテレビで新潟県中越地震の状況を居ても立ってもおれない気持ちで観ておりました。こういう地震が起きた今の時も、日本全体としても、世界においても、そしてこの間台風の被害を受けた人たちもあるわけで、ここにはいろんな問題があります。今何が必要なのか。やはり隣人を自分のように愛するという事ではないでしょうか。そしてわたしはそれを更に、近頃繰り返して言うことですが、愛とは痛みへの共感なのです。人がいろんな形で持つ問題、痛み、苦しみ、悩みを本当に思い遣る。それが本当に無くてならない唯一のことです。そうでないと、当時のローマの支配をもっと大きな力が表れて覆すとなります。結局ローマも滅んだわけです。そういうローマの力よりもっと大きな力で覆すことが出来たとしても、それはまた報復を呼ぶのです。そしていつまでも暴力とか横暴な支配によって起こされる悲惨が繰り返されて、それは止まないのです。そういうことを人類の歴史は繰り返しているわけです。けれども本当に必要なのは、そういう形で苦しみを負わされた、或いはこういう天変地異によってもそうですけれども、これから寒さに向っていくそういう人のことも思い遣り、自分に出来ることをしていく。そういうことが神様が、イエス様が、本当に私たちに求めておられることではないでしょうか。その道をイエス様は歩み抜かれたのだと思います。それが十字架に至る歩みであったのです。

そういう点で今日の箇所は、読んだだけでは何が問題になっているのか少し分かり難いのですが、言い直せば、「あなたは今、本当に必要なことは何だと考えますか」ということが私たち各自に問われているのだということです。

お祈りします。

神様。私たちには次々と様々な問題が起きる、またわが身にも起きる、そのような中で行き詰まりを覚え、何を大事とすべきかそのようなことが分からなくなってしまう者でありますけれども、どうか、イエス様ご自身が聖書を深く、深く読まれてあなたの御心を聞き、そしてそれに従って生きられたように、私たちもあなたの御言葉を求め、与えられた御言葉に従って生きる者としてください。

この祈り、イエス様の御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン